

質問および意見書として提出します。

「淀川水系河川整備計画原案について 川上ダム建設事業における環境対策等」の説明に対する疑問

2007年10月20日

自然愛・環境問題研究所 代表 浅野 隆彦

- 1) 比奈知ダムによる現況再現とはどのように予測する事なのか？
- 2) 鉛直1次元モデルとはどのようなものか？
- 3) 鉛直2次元モデルとはどのようなものか？
- 4) ダム湖の水温は標高、太陽からの日射量の違い、流入水の量とその水温などの条件、水深などの違いから様々であり、モデルダムを使つての「予測」に大きな誤差も生じると考えられるが、その辺りの検討についての詳細を示されたい。
- 5) 水温・水質の保全対策を実施した後も、予測計算の結果、COD,Chl-a 共、高くなるということだが、この保全対策とは何を指しているのか？
- 6) ダムサイト表層の Chl-a は曝気循環設備の実施により、前より1.6 $\mu\text{g/L}$ 減少する予測だが、この予測での設備の配置位置、設備の単位当りの能力・消費電力、台数、年間運転経費、設備費などを示されたい。
- 7) 流入水温と放流水温の保全対策後の差が、月毎にグラフとして示されているが、この予測に用いた条件(流入量その他)を詳細に示されたい。
- 8) DO 対策に用いる深層曝気設備はこの予測でどのように配置され、どのように使う条件としたのか？6)に述べているような年間運転経費、設備費までを示されたい。
- 9) 各河川におけるオオサンショウウオの生息密度の比較では1~2年古いデータに基づいての比較になっている。平成18年度のデータも確定しているので、訂正すべきと思うが、いかが？
- 10) 尚、オオサンショウウオの生息調査は夜間に行わなければ巣穴から出ていない為、把握が難しい。夜間の調査も容易ではなく、今現在、十分な確認が出来ていない。流域で最大、1,800固体(成体)が推測されていたこともあり、本格的な調査をやらなければならないが、今後の調査計画予定を示されたい。
- 11) ダム予定地の上下流間および前深瀬川・川上川の河川間を移動する固体は、ほとんど確認されていない。としているが、「絶対」ではない。最も確実なのは両河川の固体から僅かの組織を採取し、DNA鑑定をすることであり、これは水資源機構から独立した調査組織、検査機関が実施すべきであるが、河川管理者としてどう考えるか示して貰いたい。
- 12) 人工巣穴はどのような所にどのように設置するのか示されたい。
- 13) 昨年6月に小河内付近にて「人工巣穴」を見たが、水温23度で溜りに近い脇のゆるい流れに剥き出しの状態に在った。コンクリート製で鉄製マンホールが乗っていた。コンクリートも日射の為、手も付けられぬ熱さになっている。このようなものが有効なのか？また出水時に転がっていくように思えたが、害のほうが多いものは使用しないのが基本だと思うが、どう考えられるか？